

留学を終えて

聖マリア女学院高等学校 木田 雅乃（アメリカ合衆国）

私は2024年9月から2025年5月までの約10か月間、アメリカの高校に留学しました。この10か月間は、私にとって人生の転機となるほど多くの学びと気づきを与えてくれました。言語だけでなく、文化や価値観、人との関わり方まであらゆる面で成長できたと実感しています。

多様性の環境に身を置き、学んだことがあります。私が通っていた高校は、とても多様性にあふれた学校でした。心と身体の性が一致しないトランスジェンダーの方や、同性愛者の方もごく自然に学校生活を送っており、周囲の生徒や先生方も彼らを特別扱いすることなく、一人の人間として尊重していました。日本では、このような方々が未だに「特別な存在」として見られがちであり、その違いに最初は驚きを感じました。しかし、次第に私自身も「違いを違いのまま受け入れる」という姿勢が自然と身についていきました。

また、人種の多様性にも驚かされました。アフリカ系やヨーロッパ系、アジア系、ラテン系など、さまざまなバックグラウンドを持つ生徒たちが一緒に学ぶ教室は、まるで小さな国連のようでした。日本では人口の大多数が日本人であるため、このような環境は非常に新鮮で刺激的でした。私はこのような多様性にあふれた環境に身を置くことができ、本当に楽しく、充実した毎日を過ごすことができました。人と人との違いを受け入れ、尊重する気持ちが、以前よりもずっと強くなったと感じています。

語学面では、最初の頃は思うように言葉が出てこず、悔しい思いをすることもたくさんありました。特に印象に残っているのは、全校生徒の前で日本についてのプレゼンテーションをしたことです。初めての大きな発表だったため、緊張で声が震え、ずっと原稿から目を離すことができませんでした。英語の表現が間違っていないか不安で、自信のなさが自分でも分かるほどでした。その発表が終わったあとに、「もっと堂々と話せばよかった」、「日本の魅力をもっと伝えたかった」と後悔ばかりが残りました。

しかし、その経験が自分を大きく成長させてくれました。しばらく経って、生徒や保護者の前で卒業スピーチをする機会をいただきました。私はそのとき10年生でしたが、特別に卒業式に参加させていただくことになり、代表のスピーチを任されました。前回のプレゼンテーションの失敗がずっと心に引っかかっていた私は、「今度こそは堂々と話そう」と決意し、何度も練習を重ねました。

そして迎えた発表当日、自信を持ってスピーチをやり遂げることができました。会場の反応も温かく、スピーチが終わったあとには友達や先生方から「成長したね」、「すごく良かったよ」と声をかけていただき、本当に頑張ってよかったと心から思いました。この経験を通して、「英語を完璧に話すこと」よりも、「伝えようとする姿勢」や「自信を持つこと」の大切さを実感しました。

今回の留学経験を通してかけがえのないものを得ました。この留学で得た最大の成果は、自分自身を深く見つめ直す機会を得られたことです。慣れない環境の中で、自分は何を大切に、どんな人間でありたいのかを考えるようになりました。日本では、無意識のうちに周囲の目を気に

して生きていた自分が、アメリカでは「自分の意志で動くこと」の大切さを学び、少しずつ自信を持てるようになっていきました。

また、異文化を理解し尊重し合う姿勢は、今後いかなる環境であっても必要になる力だと思います。この留学経験を通して得た視野の広さや柔軟な考え方は、きっとこれからの人生においても大きな力になると信じています。

留学生活は、決して楽しいことばかりではありませんでした。言葉の壁や文化の違い、孤独感到悩んだこともありました。しかし、そのすべての経験が私を強く、前向きにしてくれました。将来は、国際的な環境で働くことを目標にしており、その第一歩としてこの留学経験はかけがえない土台となりました。

これからも語学力や専門知識を高める努力を続けながら、どのような環境でも臆せず、自分らしく行動できる人であり続けたいと思います。そしていつか、あの留学の日々を思い出しながら、「あのとき挑戦してよかった」と胸を張って言えるような人生を歩んでいきたいです。